

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

デビルクエスト ～デビルサマナーの転生日記～

【作者名】

R a s k 8 6

【あらすじ】

この物語は、

可能性の終着点であり、

運命の終わりを越え、

神をも凌駕した、

そんな男が起こした一つの奇跡を、

とある神様が祝福した。

そんなお話です。

【注意】

文才#0な作者がお送りいたします。

作者はメンタル弱いので、批判などはおやめください。

これは、ドラ エなどをこった煮にした世界なので、おかしいところもあるかもしれません。

以上の事を了承していただければ、ありがたいと思います。

(感想をお待ちいたしています)

追記：タグ増やしました。アンチは保険です。

プロローグ：始まりは終わりであり、終わりは始まり

その日、自分は死んだはずだった。

何とか「二途の川らしき川」を殺し、死の運命から逃れたはずだった。

それでも、『二途の川らしき川』に居ると言っことは、死んだのだろう。

まあ、もう一度以上チャンスはあるが。

「あいつ等」は元気だろうか。最後の最後で皆、死に掛けてたからな。そう思っていたら、見覚えのある、カW（ゲフンゲフン）顔がやってきた。

「やあ、久しぶりだね。君ほどの人間がここにまたやってくるなんて、いったい何をしたんだい？」

「ああ、『死の運命』から逃げ出したくてね。神殺したんだ。歪んでいても、俺は人間って事さ」

「・・・またそんなことを・・・そうそう、いつもなら何も言わず、すぐに『送って』あげる所だけど、さすがに『ガイアの修正力』には逆らえなくてね」

「二途の川らしき川」が面白く感じる言葉を発した。それに反応するのは彼の癖と言えるだろう。

「ほほう、万能なお前ができないことか・・・次の目標かな？」

「ははは。何、これで終わらせる気はないよ。君との約束でもあるしね」

「二途の川らしき川」やめてくれよ、恥ずかしい。結果としてこうなっただけで、ここに至るまではお前に頼りきりだったじゃないか」

顔を少し赤くして答える。 ヤロウメ、キメエヨ

「ま、それでも君には世話になったんだ。僕は僕なりの恩の返し方があるんだ。少しくらいはいいじゃないか」

「人生50回分の恩って何だよ……」

「突っ込んではいけない、おk?」

「おk」

やはり元相棒同士だったからか、コントまでも息ぴったりな二人だった。

「さて、話がずれたね。さっき、確かに『ガイアの修正力』には逆らえなかったと言ったが、何もわざわざ『あそこ』に戻す必要はなかったんだと思ってるね」

「……何が言いたいんだ?」

「簡単に言つと、とある世界に転生させたいと思つんだ」

「……ファッ!?!」

予想外の言葉に耳を疑ってしまう。

「僕ほどの悪魔……まあ、神様だけど、それくらいになると、人を転生させることも造作もなくなる。今までやってきたことも、転生の応用編だしね」

「何それ初耳」

「そりゃ今始めて言つたし」

「おk、把握」

「おkおk。……何回話ずれるんだよ、まったく」

やはり元相棒drrry(ry)ryryry

「本題に移ろう。君のことだから、戦いのないところでは生きていけないだろ?。」

「ああ、その通りだ。俺は戦い以外で優れたところはないよ。」

「いや、料理とか色々あるでしょうに(････べつにいいか、それがいいところだしね」「ボンッ」

「何か言ったか?。」

「いや、別に?また脱線したね。それで、君が行く世界は

冒険と勇気、剣と魔法の世界だ

終 き舞 が使えるようになる。

敵には非情で、仲間（魔）にも厳しいが、仲間思いな一面もあるよ
うで、一部のデビルサマナーから神格視されていた。

そのため、東方で言う神力を持っている。そのため、神と戦える数
少ない人間の一人である。なお、神力を自分が持っていることは知ら
ない。

「との戦闘で死去。その後、昔救った悪魔の手を借りドラク
エ世界に転生。

なお、一人でも魔人を相手にできることから、魔人番号0番真の魔人と呼ぶ。

人修羅の忘れ形見。つまり公式チート。

あなたのレベルが足りません 全てを観覧できません

管理者

LV

NEXT

HP ***** MP *****

(迫真)

力 *****
魔 *****
体 *****
速 *****
運 *****

プロローグで主人公と会話していた少女。

風戸の元仲魔。過去に7度助けられた事から、死んだときには生き
返らせてあげる約束を結んだ。

その力は「」をも越えている。

あと女。まじで。メガテンにしては珍しく、テラ美少女。金髪に蒼

0・5話 ボツシユウウウツ！ チヨウ エ
キサイトイン

「・・・k w s k頼むわ」

一般人のような姿をした少年が、金髪の美少女に問う。その声には、疑問が籠っているように感じることが出来る。

「簡単に言つと、ドラゴンでクエストな世界と運命な型月世界をY U U G O U した感じだよ」

「なるほど、何それ楽しみすぎる」

彼の瞳に好奇心金の強い視線が揺らぐ。金髪の美少女はそれを見、はあ、とため息を付く。そして、我々視聴者様にとって、一番重要かもしれないことを言う。

「そして、特典に関してだけど

美少女が、声を発しようとした瞬間、主人公風戸の目に炎のような光が灯る。

「君のレベル魂の器に合わせて選べるものが変わるからね。えつと、君の場合は

風戸の目が、子供のように輝く。

「概念魔法」と、4種類の「極限魔術・特技」、「自由枠」が1つ、「ランダム枠」が1つだね」

「よし、決定した。この間0・3秒！」

「早えよバーロー。んでなぜに0・3秒まで言っし」

「お前には省略、早さが足りない！」
「省略まで言っなし」
「いいじゃん別に」

はぁ、と一息入れ、呟く。

「おk・・・まったコントじゃないですかヤダー」
「まったく、何でこんなに脱線するのかな？」
「お前が原因だよ」
「(´・`・)(シヨボーン」

やれやれとまた呟き、話を本題に戻す。

「さあ、どんなのにするんだい？」

期待が籠った目で風戸を見つめる。

「そう言えば、前の特技や魔法は？」
「うーん・・・引き継げるよ」
「おk、それなら」

「概念魔法」には「作成魔法」、4種類には、「ンダ」「カジャ」「アギ」「ブフ」系統を。自由枠は、魔術と武術の才能。・・・あれ、これ升臭い・・・」
「それこそ今頃だよ」
「それもそうか」

そして、風戸はハッとしたりのように顔を上げ、「美少女」に聞く。

「ランダム枠は？」
「うん、今引くよ」

「オンドウルマダヒイティネエンディスカー!？」
「今引くつてば……」

風戸がコントしている間に、「美少女」はガサゴソと、コンビ二に置いてあるようなくじ引き箱を漁っていた。それを見た風戸は、「美少女」に問う。

「……なんて言つか、雰囲気が……」
「じゃあこれでする?」

そういつて取り出したのは

「……ごめん、戻して」
「……うん」

100円ガチャポンだった。

「さあ、気を取り直していくよー!」
「ウヘーイ」

「美少女」が、脱線しかけていた話を戻そうとする。それを風戸はネタで返す。それに対し、またもや「美少女」はため息をついているが、風戸は気にしていない様子だった。

「(ガサゴソ)んー、っと。これかな!……なにになに?」

いきなり顔を右になったかのように固める「美少女」に対し、風戸が質問する。

「どっした?」

「……うん、これはひどい」

そこには

「新魔術・魔法を生み出す能力」と、書かれていた。

「どうしてそんなに驚く？」

「そりゃあ、メラ　メテオ並みのワープ進化という異次元改造するよ
うな能力だからさ……　わかりやすく言うと、課金至上主義ゲーム
で、ノーマルガチャから、EXとか、XRとかが出るようなものだよ
」？」

「　　う　　わ　　あ　　」

後日談だが、このくじ引きには、「自分のオリ創造&流出、Dies・
iraеシリーズの、全ての創造&

流出を扱える能力」とかもあったらしい。

そして時は動き出す……

「さて、そろそろ逝こうか。たぶん、皆さんも待っているかもしれない
し……うん。ボッシュートです！風戸を世界にシューウウウウツ
」！

「おい字が違うぞみなさんてだれさそれとうん知ってたアバ
ニヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!?」

さも当然のごとく落とす、鬼「美少女」だった。ソレニロリBB A

ダシ。

チヨ、ジゲンコエテマデコッチコナイdウフアアアアアアアア!

0・9話 モノローグ

ヒュルルルルルルルルルと言つ音と共に、風戸は落ちて行く。そして、心の中で悪態を付く。

(いつも生き返らせてくれるのは有難う・・・けどさあ、これはちょっとひどくねえ!?)

そう考えていると、雲を突き抜けた。簿分という音と共に、少し寒さを感じる。すると、風戸を待っていたのは

壮大で、美しい自然だった。鳥が飛び回り、木は生い茂り、獣達は鳴き続ける。

「・・・地球も、昔はこんなだったのかな？」

風戸は呟く。が、これにより自分がどんな状況に居るのかを思い出す。

「・・・あ、今落ちてるんだっただ!? やべえやべえどうしよう!?!」

彼の頭の中には走馬灯が走る。

子供のころの楽しかった記憶

あの日常を壊した父の死

自分が剣を持つこと

になった事件

自分の本当の父との遭遇

「との戦闘」

そして、転生する記憶

「あ、新しく魔術作ればよくな？」

そう考え、何かを考え込む風戸。その間にも、地面はどんどん迫ってくる。その時、ふと腰についている愛銃と、愛剣を見た。瞬間、「ナニカ」が頭の中に流れ込む。すると、「ナニカ」から、謎の「既知感」を感じる。しかし、なぜかその「ナニカ」や、「既知感」からは、なにか暖かい

そう、自分の物が、手元に帰ってきたような感じすらした。

その「ナニカ」を受け入れると、数個のキーワードが頭をよぎる。

聖遺物

減速

停止

逆行

次の瞬間、自分の口から、知らない言語が次々と出てくる。まるで、

日本に住んでいる一般人が、外国の会議に放り込まれたように。それに驚いた、次の瞬間だった。

「 形 成 ・ ・ ・ 運 命 の 歯 車 」

自分の口から信じられない言葉が聞こえた。形成・・・だと・・・!? ちよ、ここはDies原作じゃないはずだが(メメター)。

風戸の後左右に、縦40cm、横1mほどにかけて、某弓兵の世界の背景のような歯車郡が現れる。そして、だんだんと落下スピードが落ちて行き

完全に止まった。

そう感じた瞬間だった。

時が巻き戻るかのように、

風戸と歯車郡が上昇し始めたのは。

鳥は飛び立った木へと後ろから戻り、たった今飛び跳ねた猿は真後ろに跳ね返るように戻り、滝の流れは重力がひっくり返ったかの如く戻り始める。

しかし、たった一つ。その一つだけはその「現状」に左右されず、たった今、「新しい」を刻むのが

を引き起こした、張本人であった。

新城 風戸。この事態

(本人はそれをわかっていないようだが)

1話：それからどうした

「・・・」

とある人はいった。『常識に囚われてはいけない』、と。
ただ、囚われなかったら如何なるか

しんじょう かぎと

しょくぎよう：まかいたんてい

レベル：87

じゅうげきりよく：9999

ぼんぎよりよく：897

ちから：972

みのまもり：451

すばやさ：999

きようさ：999

みりよく：999

まりよく：999

かしこさ：999

いんし：* p

まほう

ンダけい カジャけい アギけい

ブフけい さくせいまほう マハジオ

とくぢ

こついつせん そついつせん
たちきるやいば きしよつてんけつ
せいいつてん こついつてん
おたけび

パッシブ

せてんのかいしん けものがんこつ

とくしゆ

かつどう けいせい ? * :

そつび

ちのようにあかいマフラー
ちのようにあかいぼつし
まっくるなコート
まけん「こんとんとつ」

「ぶじつてぶじつなつた」

事の始まりは、形成を使った後だった。

その後、慌てて『形成』を終了し、地面に降り立つ。

そもそも、風戸はDies系に関して詳しくたため、なぜ『活動をすつ飛ばして』形成』をなぜ使えたのか、そもそもなぜエイヴィヒカイトを使えるのか、いろいろと考えているうちに、風戸はこう考えた。

「あれ？テンプレならステータス見れるんじゃない？」

と。

結果、ああなってしまったのだ。

回想を終わらせた後で、今の自分の場所を探る。さっき落ちるときに見た大自然・・・うん、見覚えがないな・・・、そう思っていると、後ろのほうの草原から「キンツ！」と言つ音が聞こえてくる。音がらして、鉄同士をぶつけ合わせるような音だ。それも、全力でぶつけ合うような。風戸は、今までの経験悪魔との戦いからそう推測する。

「???サイド」

キンツと言う乾いた鉄の音が鳴り響く。くそ、油断していた。4人がかりなら、ランクDの魔物にも太刀打ちできると過信していた。僕は、自分をここまで鍛え上げてくれた恩師との会話を思い出す。

「戦場で、もっとも危険な行為が、「見せられないよ!」と、過信、根拠のない自信だ。前者は体力がなくなる。んで怪我して引退するんだ」

「全部実体験ですか?」

「うむ。後者は、剣の動きと判断を遅らせる。隙を突かれたり、思わぬ伏兵への対処が遅れる。わかったか?」

「わかりました」

あの時、わかったフリをしていただけなのだろう。仲間も、幸いにタヒンではないが、もはや戦えない。ヒーラーの子が必死に治療しているけど、僕もやられたらさすがに持たない。

ほかの事を考えていたからだろうか。僕は目の前に迫る剣
さまようよろいの攻撃に気づけなかった。ああ、僕の冒険者
人生は終わってしまうのか。そう考えたときだった。

目の前の剣ごと、さまようよろいの腕が凍り付く。そして、僕は魔力をたどって、魔法を使った人物を見つけるのだった。

2話：升の気配（今頃）

「風戸サイド」

ってか因子ってなんだよ、何の因子だよ。そう思いながら、鉄と鉄をぶつけ合うような音のする方向へと向き直る。

あっちゃー、襲われてる、のか？そう思いながら、敵となりうる鎧を見つめる。

やっぱ、動く鎧か。あれ？彷徨う鎧だけ？

そう思いながら、自分は呪文を唱えてみる。

「……ジャム？」

今何かどこかで「なぜに疑問符」とか聞こえた気がするけど、気のせいだよな？

そう思っていると、ヒヤドは彷徨う鎧の方向へ向かっていった。

そして、ヒヤドは青年の命を絶とうとした刃に当たり、その腕ごと地面と凍らせた。

意外と威力、あるんだな。そんな事を思いながら、もう一度呪文を唱える。

「……イオ！」

唱えられたイオは、光球となり、目標彷徨う鎧へと向かっていく。当然、腕ごと地面へ縫凍い付け凍られて凍いる彷徨う鎧は避けられるはずもなく、爆発四散する。

アイエエエ!? イオ!? イオナンド!? とか言いたくなかったのは俺だけじゃないはず。

そんなどうでも良い事を思っていると、少年の Yery がこちらを見る。

なんとなくいやな予感がする。そう思い、草々にその場を去っていった。

〜カットイン『今日の議題：ノ口の辛さは異常』〜

うん、ブフを応用してヒヤドに変化できたし、イオ的なのはどうなのかな〜とか思ってたけど、アギとブフ融合して、所謂水蒸気爆発的なものから、イオに変化したみたいだ。

閑話休題。

あそこから離れた丘に来たわけだが・・・ 遠くに町っぽいのが見えるな。ふむ、最初の町か・・・ で言うセントなシュタインかな？
え？村？なにそれ初耳。

一旦、自分の魔法的なものを確認しよう。自分の力を知らないとならないのな諺があったはずだ。なんだっけ？自分の戦力と敵の戦力を知らば、百戦危うからず、だっけ？まあいい、まずは確認こっちに集中し

よう。

今わかった魔法配合？表・・・アギ⇨メラ　ブフ⇨ヒヤド　アギ+
ブフ⇨イオ

その他・・・威力的に一段上っばい。メラ⇨メラミ的な。

さすが升能力さん！世界観をぶち壊しだぜエ〜！そこに痺れる(物理的に)
(主に所謂踏み台が) 憧れるウ〜！

うん、改めてみると、升だわこりゃあ。例えると、桃鉄99年で、一人TASで残り初桃鉄な人？っていう感じ。相手は乱数調整で最適な数字を出しまくるのに、こっちはへっばい。

とりあえず、あの町を目指してみるか。そう思いながら、またもや草々に駆けてゆくのであった。

「よ〜じ・・・少女サイド(震え声)」

うん、うまく扱えているね。さすが風戸だ。‘*+’・・・人修羅の血を受け継いでいるからかもね？あいつは多種多様な勾玉を使い分けていたからね。・・・おっと。そっだそっだ。忘れるところだった。

画面の前の諸君。これからも、彼　風戸を見守ってやってくれたまえ。あいつは色々と抜けているところがあるからね。

マ、ソコモミリヨクノウチ、ダケド。

3話 翼を欲した少年（無意味）

とある場所に、小さめながらも、全体を城壁で囲まれた町がある。そして、町は活気あふれていた。そんな中、群集に一人、雰囲気の違いが居た。黒い外装に身を包み、腰には拳銃と片刃の剣。東方の地で、カタナとよばれている。 を下げている。

そう、我らが風戸君だった。

あの後、近くにあった街のことを思い出し、とりあえず、いかなければと思い、町の方向へと歩き出したのだ。（先程の少年達を遭遇するかもしれないと言っのを考えてなかったようだ）

ふと、隣の方にある掲示板のようなものを見る。そこには、張り紙が張ってあった。

町中央の闘技場にて、バトルロイヤル開催！詳しくは会場にて

・・・よし、行くぞ。そう考え、風戸は、会場である闘技場へ向かうのであった。

カッティン（＝A＝）ニイトツカ

風戸は、会場とされる闘技場へとたどり着いた。過程はすっ飛ばして貰った、このディアポロがな！

それはさておき、会場の闘技場に到着したわけだが、なんだかざわめいている。近くの一人に話を聞くと、

「もつそろそろ大会の受付が締め切りだよ。なんでも、最後に登録した人は、シード権があるとかないとか・・・」

と言う事だ。・・・やばくね？そう思い、大会の受付を探す風戸なのであった。

「ご都合主義者 風戸氏

風戸が大会の受付に到着した頃には、受付終了の時間まであと数分を切ってしまったていた。

全力ダッシュで受付に駆け寄る。受付の人は驚いていたようだが、関係ない。

「すみませーん、まだ、大会のエントリー受け付けてます？」

「・・・あ、はい。丁度貴方が最後ですね。え・・・っと、最後の人はシード権を獲得でき、決勝戦トーナメントに出れるそうです」

なにそれご都合主義。そう思いつつ、質問(?)の方に意識を傾ける事にした。

「それと、登録名はどうしますか？」

「えっと、偽名でも？」

